

『倫理学論究』、vol. 6, no. 1 の内容

本号には、2017年に晃洋書房から出版された小西真理子氏の著書『共依存の倫理——必要とされることを渴望する人々』について、安井絢子氏の書評を掲載し、本誌の慣例にしたがって、小西真理子氏からそれにたいするリプライをいただき、あわせて掲載した。

ケアの倫理という思想は、誰もが傷つきやすく、ケアされることを必要としていると説く。それゆえ、ケアの倫理は、他者に依存することなく、自立かつ自律する個人という人間像を追求してきた近代にたいする異議申し立てという意味を含んでいる。ケアの倫理からすれば、なんら他者のケアを必要とせず自分だけでやっていける存在として自己を思い描こうとする発想は、自分自身を実際以上に強い者と思い込みたい抑圧や自己欺瞞のなせるわざだといいたくなる。

しかし、ある人間が特定の相手に依存しており、その後者もまた前者に依存することでその濃密すぎる関係から脱け出せない共依存に陥ることについては、ケアの倫理の論者も、通常、否定的な態度を示している。ところが、この共依存という事態に新たな視点からの捉えなおしを提示したのが上述の小西氏の著書である。小西真理子氏は Carol Gilligan を中心に研究を進めてこられた。叙述の著作は日本のケア倫理の研究史に新たな一頁を記すものである。安井絢子氏は Nel Noddings を中心に研究を進めてこられた。安井氏はその書評のなかで、共依存がケアの倫理の観点からしても肯定しがたいものであることを提起している。これにたいして、小西氏は「倫理」と〈倫理〉を区別することで共依存関係をそのあるがままのかたちで受け止めるには、「倫理」が暴力として働いてしまいうる点を指摘している。

本号で安井氏と小西氏とのあいだにかわされるコメントとリプライは、ケアのまなざしをもって人間をみるとはいかなることか、ケアの倫理とはどのようなものであるのか／ありうるのか／あるべきか、倫理とはどのようなものであり／ありえ、どのように機能しうるのか、といった問題について新たな一石を投じるものである。

本号にはほかに、鶴田尚美氏の論稿“Why did Rachael need implanted memories? —— A reflection on the role of memory in a human life in Ridley Scott’s *Blade Runner*”を掲載した。

優れた論稿を寄せられた安井氏、小西氏、鶴田氏にこの場を借りて御礼申し上げます。